

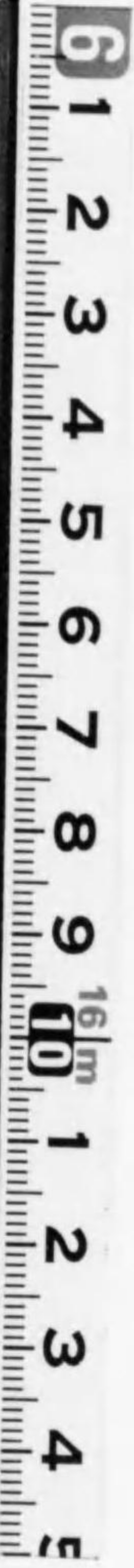
特224

54

郷土傳説  
炭焼長者



下伊那教育會



始



特224  
54

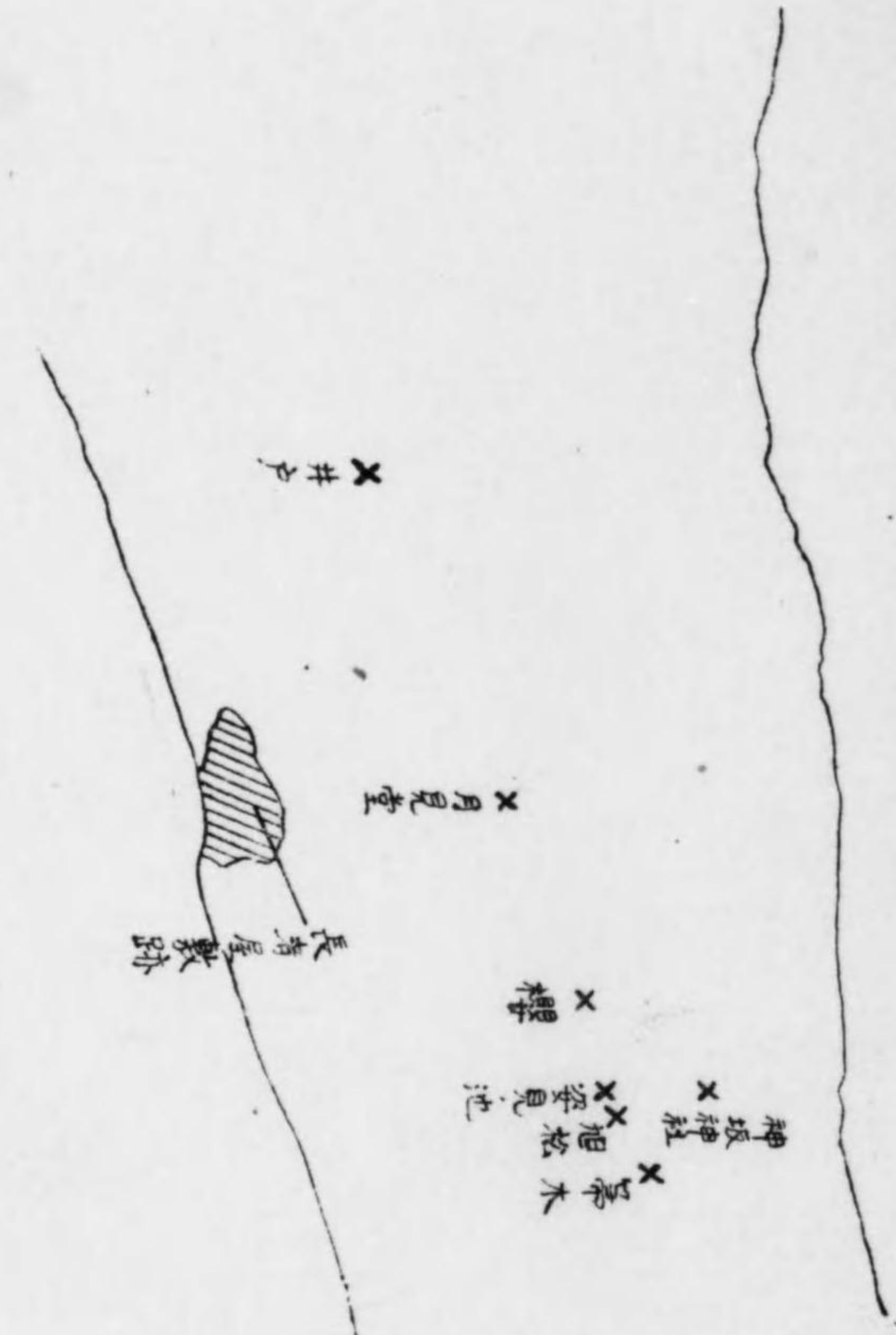


郷土傳説  
炭焼  
長者





神皇正統記





目次

炭焼長者	一
ひるがみ	九
二人のお爺さん	一三
如來様	一九
大蛇が城	二三
河童の話	二九
狒々退治の話	三四
山寺の小佛様	四二
赤い夕顔	四五
寶珠の玉	五〇
犬神様	五七
尾科の文吾	六〇

炭焼長者

一

昔、京都のあるお公卿様に、一人のお姫様が  
 ありました。或夜の夢に、日頃信心してゐる住吉明神様  
 があらはれて、信濃の國の園原の里に、吉次といふ若者  
 が住んでゐる。かゝるあなたは、今からそこへ行つて、  
 吉次の妻になるがよい。行末は二人に大きなしあはせ  
 を授けて進ぜよう。



とおつげがありました。

お姫様は、氣にもかけずにゐましたが、三晩もつゞいて同じ夢を見たので、ふしぎに思つて、それを父母に話しました。父母も、「それはありがたい夢だ。きつと神様がお守り下さるにちがひない。」といひました。それから、いろくゞさうだんした末、神様のおつげにしたがつて、お姫様は、はるくゞ信濃をさして旅立ちました。

園原の吉次は、その頃、まづしい炭焼でありました。たつた一人て山小屋に住み、焼いた炭をばお米にかへて、やうくゞその日を暮してをりました。そんなところへ、

突然、都のお姫様が尋ねて来て、およめになりたいといひますので、吉次はびつくりしてしまひました。しかし、だんくゞ話を聞いてゐるうちに、そのわけがわかりました。そこで二人は夫婦になりました。

## 二

吉次の家はびんばふで、やつと暮してゐましたのに、妻が出来ましたから、その日その日の食物にも困るやうになりました。妻は、このやうすを見て、或日、おびの間から小判を一枚とり出し、「これをお米にでも何にでもか

へて来て下さい。」と申しました。炭とお米を取るかへ  
るここのほかには、お錢といふものを知らない吉次は、  
「こんなものとお米とかへられるのか。」と思ひながら、そ  
の小判をしつかりにぎつて、駒場の町へ出かけて行きま  
した。  
阿智川にそつて、だんく下りて行きますと、青くたゝ  
へた淵の岩の上に、真白い鶴が一羽立つてゐるのが見え  
ました。吉次は、思はず手に持つてゐた小判を投げつけ  
ました。小判は岩へあたつて水に沈み、鶴は遠くの方へ  
逃げて行つてしまひました。

吉次は、小判をなくしてしまつたので、仕方なくわが家  
へ歸りました。そして、ありのまゝを妻に話しますと、  
妻は、

「それはもつたいない事をなされた。あれは、小判とい  
つて、黄金で出来た日本一のおたからです。」

「なに、あれが黄金か。それなら炭がまのわきに山ほど  
ある。」

と吉次がいひました。妻はふしぎに思つて、吉次の後に  
ついて行つて見ますと、なるほど、その言葉通り、そこ  
ら一面に黄金がきらりと光りかゝやいてをります。毎



日焼きすて、おいた炭頭が、みんな黄金になつてゐるの  
てありました。

たくさんな黄金を見つけた吉次は、たちまち長者になり  
ました。そこで、木をきつたりがけをうづめたりして、  
大きな家をたて、住みました。人にも親切にして、物な  
どほどこしてやりましたので、吉次は、園原の伏屋長者  
とよばれるやうになりました。

三

長者になつた吉次夫婦は、しあはせに暮してをりました

が、はるく、この山國へ来た妻は、さすがに都の空がなつ  
かしくてなりません。した。「祇園の櫻はもう散つたか、  
賀茂の河原に夏は来たか。」と思ふたびに、都にのこして  
来た母のこころが思ひ出されました。  
或日、ふと、都の方をながめるこ、向かふの山に、母が



木 帯

手招きをしてゐる姿がありく  
こ見えます。「母上か、なつかし  
や。」こかけよつて見ましたが、  
母の姿はありません。そこには  
一本の木が、風のまに、枝を

うごかしてゐるばかりでありました。  
その後、この木をばき木とよぶやうになりました。  
吉次夫婦は、長く園原に暮してゐました。今でも長者屋敷の趾こいふのが残つてゐます。

ひるがみ

日本武尊が、東國の悪者どもを御征伐になつて、めでたく都へお歸りになる時、信濃の國をお通りになりました。諏訪の方から、天龍川についてこの伊那路へおはいりになり、今の駒場のあたりから、美濃の國へお越しにならうとして、けはしい山路におさしかかりになりました。このあたりは、山又山で道もけはしく、雲がいく重にもかゝつてをります。けれども勇ましい尊は、かまはずん

ずんぞ上つておいでになりました。  
 この時、山に住んでゐる悪い神様が、尊を困らせてやらうと思ひ、大きな白鹿にばけて、尊の前に立ちふさがりました。これはあやしいとお氣づきになりましたから、尊は、ちやうどその時噛んでおいでになつた蒜を、手早くお投げつけになりました。蒜が鹿の眼にあたるこ、鹿はそのまゝ死んでしまひました。  
 ところが、今度は急にこい霧がもくくとまきおこつて、一寸先も見えなくなりました。尊はこうく道をお失ひになりました。しばらく深い山の中をさ迷つておいでに

なりますと、どこからか一匹の白犬があらはれました。

犬は、尊の先に立つて、峠の方へ上つて行きます。その様子が、尊の御案内をするやうに見えましたので、尊は、その後について上つておいでになりました。かうして、



尊はようやく山を越え、里へ

お出になることが出来ました。  
それから後、この山を越す時には、蒜を嚙んで行くこわざはひをのがれることが出来ると言ふやうになりました。智里村の晝神が、この話のあつた場所で、尊のお越しになつた山が、今の御坂峠だといふことであります。

### 二人のお爺さん

昔、山本村に、金持のお爺さんさびんばふなお爺さんが、軒をならべて住んでをりました。

或日の夕方、きたないなりをした一人のお坊様が、どこからかやつて来て、金持のお爺さんの家へ行き、

「どうか一晩さめて下さい。」

とたのみました。けれども、お爺さんは、お坊様のみなりがあまりにきたないので、すげなくここをりました。

お坊様は、今度は、おこなりの家へ行つてたのみました。すると、そのびんばふな家のお爺さんは、

「こんなあばら屋でもよろしければ。」

といつて、喜んでとめてくれました。その上、たつた一枚しかない自分のふとんを着せてくれました。

次の朝、お坊様は、ねんごろにおれいをのべて、

「お前の親切な心には、つくづく感心しました。實は、

私は如來です。世間の人たちの心をためさうと思つて、かりに姿をかへて來たのです。昨夜とめて貰つたお禮に、家の前に木を一本植ゑてあげるから、その木で何

でも好きなものをこしらへてお使ひなさい。」

さいつたかと思ふと、お坊様の姿は、かきけすやうに見

えなくなりました。お爺さんは、夢ではないかと思ひま

したが、やがて外へ出て

見ますと、お坊様のいつ

たさほり、家の前に一本

の木が生えてゐます。

しかも、それが見てゐる

中に、ずんく大きくな

りました。



お爺さんは、その木をきつて、白と杵とをこしらへました。ところが、その白でお餅をつくこ、五合の餅は一升到、一升の餅は二升到といふやうに、倍づつにふえまじた。

金持のお爺さんは、それを聞いてうらやましがり、さつそく、おこなりのお爺さんの家へその白と杵とを借りに來ました。さうして、自分の所ではきつと十そう倍にもなるやうな氣がして、せつせとお餅をつくと、今度は、二升のは一升到、一升のは五合にこいふやうに、半分づつにへつてしまひました。そこでお爺さんは大へんおこ

りだし、その白と杵とをたゝきわつて、裏の原つばへ捨てゝしまひました。

びんばふなお爺さんは、そんな事は少しも知らず、白と杵とを貰ひに行つて見るこ、この始末です。お爺さんは大そう悲しがり、原からこはれを拾ひ集めて來て、それで錢箱をこしらへました。その中へ、毎日たきゝを賣つたお錢を少しづゝ入れておきますこ、それが知らぬ間にみんな小判になつてゐました。お爺さんはたちまち長者になりました。

これを見た金持のお爺さんは、又その錢箱をむりやりに

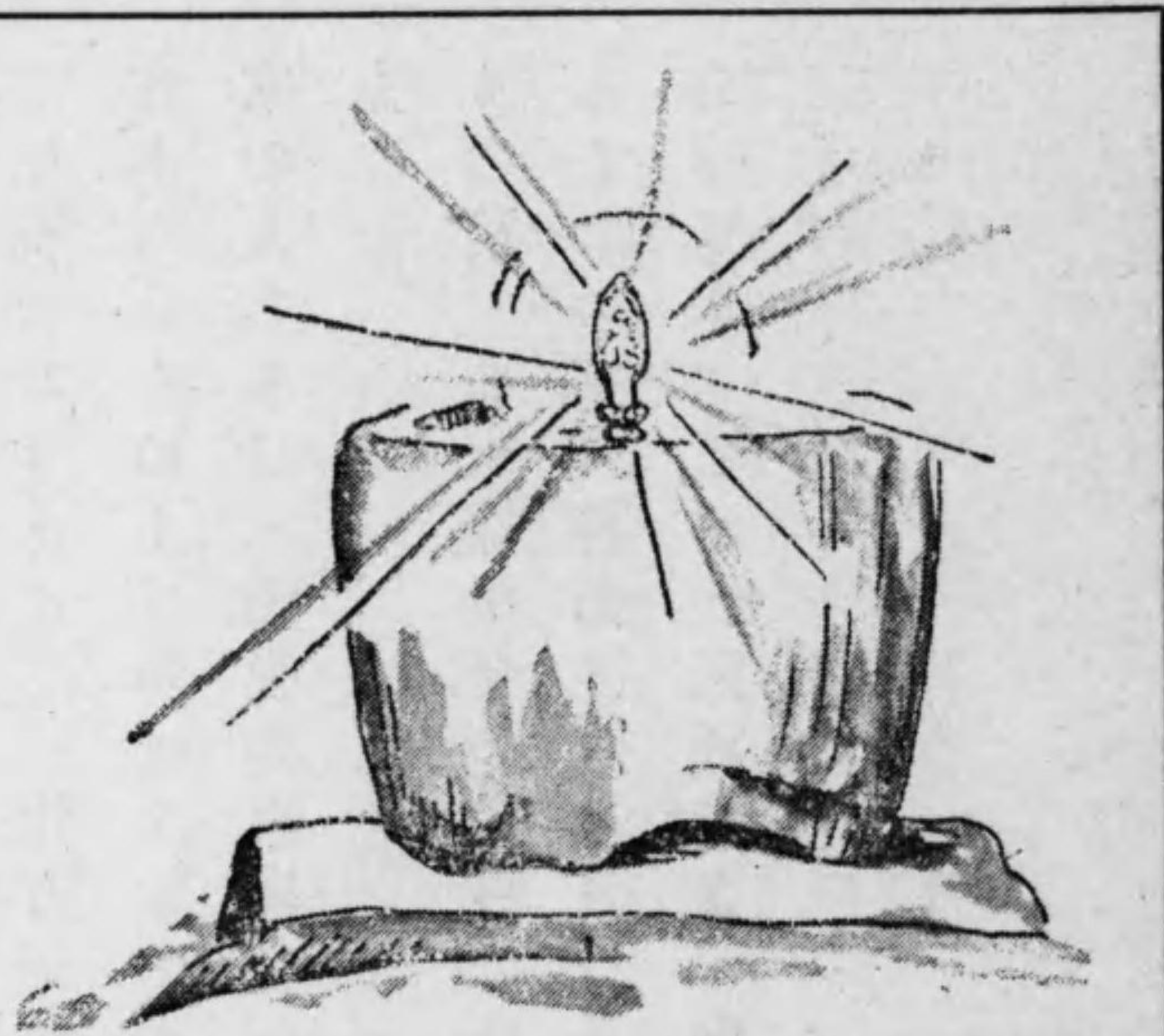
借りて行きました。今度は小判の山でもこしらへるつもりで、たんすの中のお錢をありつたけ錢箱へ入れ、をりをり中をのぞいては、今かくと待つてをりました。やがてあけて見るこ、お錢は、見るくうちにとけて、川になり、たまつて淵になりました。さうく、お爺さんは一文なしのびんばふ人になつてしまひました。今の箱川や箱淵といふ所は、その時から出來た名前、金持のお爺さんが杵をこはして投げ出した所が、杵原だといふことであります。

### 如來様

今から千三百餘年の昔、推古天皇の御代のことであります。座光寺村に、本多善光といふ大へん心がけのよい人がありました。善光は、ある年、國司のおこもをして都へ上りました。役目がすんで、いよく國へかへらうとして、難波の堀江のはたを通りかゝりますと、後の方で、「善光、善光」と呼ぶ聲がしました。ふりかへつて見ますと、堀江の中

から御光がさしてをります。善光はびつくりして、恐る恐る堀をのぞいて見ました。水の中には、小さな阿彌陀如來様が沈んでおいでになりました。善光は、いよくおどろいて、「これはもつたいない事だ。」さふしをがみま

した。それから、如來様を水の中からお出し申し、信濃の國へお迎へするここにしました。途中、晝は善光が如來様をおせおひ申し、夜は如來様が善光をせおつて下さいましたので、わづかの日數で我家へ歸るここが出来ました。さて、善光は、ほかによい場所もありませんので、家の



前にあつた石の上に、如來様をおまつりして置きました。するこ、ある夜、如來様が、善光のゆめまくらにお立ちになつて、「どうか、家の中へ入れてもらひたい。」こいはれました。けれども、善光の家は大へんびんばふで、如來様をおかざり申すや



うな所ところがありません。仕方しかたがないので、古い木きの白しろを取とり出し、その上うへにのせておまつりいたしました。善光よしみつ一家いっかの人ひとたちは、朝晩あさばん如來にょらい様さまををがんで、厚あつく信心しんじんしました。

その後のち、如來にょらい様さまを今いまの長野ながのの地ちへお移うつし申まうすことになり、ましたので、善光よしみつは、そのお姿すがたにかたどつて御像おぞうをきざみしました。これが元善光もとぜんくわう寺じの御本尊おほんぞんであるといはれてをります。

### 大蛇だいじが城しろ

天正てんしやう十年じふねんの春はる、織田おだの大軍たいぐんが南みなみの方ほうからこの下伊那しもいなへ攻せめこんで來きて、城しろこいふ城しろは次々つぎつぎに攻落せめおとされてしまひました。

その頃ころ、大島村おほじまむらに臺城たいじやうこいふ城しろがあつて、武田方たけだがたの大將たいしやうが守まもつてをりました。勝ちほこつた織田おだの軍勢ぐんせいは、枯葉かれはを吹卷ふきまく嵐あらしのやうな勢いきほひで、この臺城たいじやうへ攻めかゝつて來きました。

臺城は、天龍川へずつと突出て、三方が切り立つたやうになつてゐる要害の場所であります。川の流が城の崖に突當つて、底の知れない大きな淵となり、青い水が渦を巻いてをります。その淵には、昔から大蛇が住んでゐると言ひ傳へられ、大蛇が城をもよばれてをりました。大蛇は、昔淵



の底深く沈んだ兜の化身だといはれて、人々は恐しいものに思つてをりました。その大蛇が城へ、織田の大軍が攻めかゝつて來たのであります。城の兵士たちはよく防ぎましたが、何しろ、勝ちほこつた敵の大軍に十重二十重に取圍まれてしまつたので、どうするここも出來ません。川向かふの山の上から射下す火矢のために、城のこゝかそこから、黒煙がもくもくこ立上ります。城の落ちるのもすぐ目の前にせまつて來ました。その時、今まで何事もなかつた淵の水が、にはかにさかまき立つて、波の間から大蛇の姿があらはれまし

た。そして、今しも火の手の上つた城の方へ向いて、身ををどらせますと、淵の水が大雨のやうになつて降りそそぎ、もえ上つた火はたちどころに消えてしまひました。幾度城に火をかけても、大蛇のために消されてしまひますので、織田方では、この大蛇から退治しなければならぬと考へました。そこで、今度は、大勢の射手をそろへて、何千とも知れない矢を、すき間もなく淵の中へ射こみましました。さすがの大蛇も深傷を負つた見え、淵の面は眞赤になりました。

織田方は、この時とばかり、城の四方から火をかけ、と

きの聲をあげて攻めこんで来ました。城の兵士たちは次第に討死して、今は防ぐ者も残り少なくなつてしまひました。

この城に、一人の美しいお姫様がありました。城が一面の火になつてしまひましたので、日頃大切にしてゐた金の鶏をしつかりかへて、煙の下をのがれ出ました。敵は後から追ひすがつて來ます。お姫様は、もうこれまでさかくごをきめました。

城の隅に、一つの井戸がありました。そこは、夏になると青葉がしげり、つめたい水がわいて、お姫様にとつて

はなつかしい所でありました。やうやくこゝまでののがれて来たお姫様は、金の鶏をかゝへたまゝ、この井戸の中へ身を投げてしまひました。

それから長い年月がたつて、城の焼跡は青々草にうづまりました。そのうちに、誰いふこなく、城の井戸から鶏の鳴聲が聞えるといふうはさが立ちました。今では、この井戸も、落葉にうづもれて浅くなつてゐますが、元日の朝には、底の方から鶏の鳴聲が聞えて来るといはれてゐます。

## 河童の話

昔から、川や淵などの深い所には、河童が住んでゐるといはれてゐます。

河童は、「かはらんべ」さも言ひます。體は子供のやうで、手や足に水かきがあり、頭の上には皿があるさうです。その皿の水がかはくゝ死んでしまふさか、すまふがすきださか、又、水あびでおぼれて死ぬのは河童に引きこまれるのださか、色々なことをいひます。

下條村には、かういふ話があります。  
 ある夏の日暮に、天龍ばたを、一匹  
 の馬が、草を食べながら歸つて來  
 ました。もう、そこらに人つ子  
 一人をりません。河童は、こ  
 れを見て、こいつを水の中  
 へ引きずりこんでやらう  
 と思ひました。そつと馬  
 のうしろへまはつて、し  
 つぼをつかまへ、自分の



體へぐるぐと巻きつけて、力いっばい引つぱりました。  
 馬は驚いて、脚をふんばり、たてがみをふるつて、一生  
 けんめいにこらへましたので、こゝに河童と馬の力くら  
 べが始まりました。

両方とも、しばらくは、死物ぐるひで引合つてゐました  
 が。さうく馬の方が勝ちました。馬は、河童を引きず  
 つて、どんく家の方へかけて行きます。河童は、馬の  
 しつぼで體を巻いてをりますので、ふりほどくすきがあ  
 りません。そのまゝ、馬の家まで引きずられて來ました。  
 馬は、さつさこ馬屋の中へ入つてしまひました。

河童は、どこかに水のたまつた場所はないかと、そこら  
をさがしました。すると、ちやうど隅の方に、水の残つ  
てゐるまをけがありましたので、これ幸その中へこび  
こんで、じつとかくれてをりました。

やがて、百姓が、まぐさをやらうこ馬屋へやつて來まじ  
た。するこ、まをけの中に妙なものがをります。何だら  
うこ思つて、つかまへて見るこ河童でした。

「こいつめ。」と、百姓は、河童を庭へひつぱり出しました。  
河童は手を合はせて、

「どうか、命ばかりは助けて下さい。もう悪いことはい

たしません。」

こいつてあやまります。百姓は、かはいさうに思つて、  
そのまゝ、河童を川へはなしてやりました。

翌朝、家の前にたぐさんの川魚がおいてありました。そ  
の後も、時々、魚が置いてあつたといひます。これは、  
河童のお禮だらうこいふこことでした。

狒々退治の話

飯田市と上郷村のさかひを流れる野底川の奥に、姫宮といふほこらがあります。昔、このあたりは、晝なほ暗く大木が生ひしげり、朝夕霧が立ちこめてゐる、ちびしい所でありました。その頃、このお宮の年に一度のお祭には、一人の若い娘を人身御供に上げることになつてをりました。もしも上げないと、その年は田畑が荒らされ、作物がとれないの



で、いたし方なく毎年人身御供をそなへて來ました。お祭の日の夜明に、屋根へ白羽の矢が立つた家の娘が、その年の人身御供に上げられるのでした。或年のここです。お祭がだん／＼近寄つて來ましたので、村の人たちは、「今年はどこへ白羽の矢が立つか。と心配して、仕事も手につきませんでした。いよく、その日になりました。夜明を待ちかねて、村の人たちが、こは／＼外へ出て見ますと、はたして、白羽の矢が一本、いつの間にか或家の屋棟に立つてをりました。もう、その家では、どうしても娘を人身御供に上げ

なければなりません。家内ぢゆうの者は、娘を取りまいて、朝から泣いてをりました。

その時、一人の旅の侍が、村を通りかゝりました。侍は、村人から人身御供の話を知ると、大へん氣の毒がり、その家へたづねて行つて、

「拙者は旅の侍だが、今、そこで人身御供の事を聞いた。神様ならば、そんな無慈悲な事はなさるまい。察する所、それは、山に住む劫をへた怪物のしわざにちがひない。今夜、拙者が、娘御の身代りとなつて人身御供に上がり、きつと怪物の正體を見さけて進ぜるから、

安心しなさい。」

と言ひました。強さうな侍の、この言葉を聞いて、家の人たちをはじめ村の人々は、大そうよろこびました。

晩方になりますと、侍は、娘のためにこしらへてあつた白木の箱の中へ、刀をさげて入りました。それを、いかにも娘の入つてゐるやうにきれいにかざり立て、村の人たちがかつき、暗い山道を上つて行つて、姫宮の拜殿にそなへました。村の人たちは、どうなることか案じながら、急いで山を下りました。

夜は次第にふけて來ました。冷たい風がそよくと木の



間を吹いて、谷川の水の音が遠く聞えます。侍は、怪物の出で来るのを、今か今かと待つてをります。真夜中頃でありました。あやしい物音がして、何か近づいて来るやうすであります。侍が、箱のすき間から闇をすかして見ると、大きな怪物がぬつとあらはれました。怪物は拜殿へ上ると、ごろくのごを鳴らしながら、いきなり箱のふたに手をかけました。さたん、侍の刀が稲づまのやうに光つて、怪物ののどのあたりをぐつと一突き。怪物が、いかつてきばを鳴らし、つめを立て、とびかゝつて来た時には、もう、侍は、箱の中からをどり

出てをりました。

深夜の森の中で、侍と怪物のは

げしいた、かひが、始ま

りました。闇をさくも

のすごい怪物のうなり

聲は、山にこだまし谷

にひびいて、天地も

ふるふかとあやしま

れるほどであります

た。侍はとうく勝



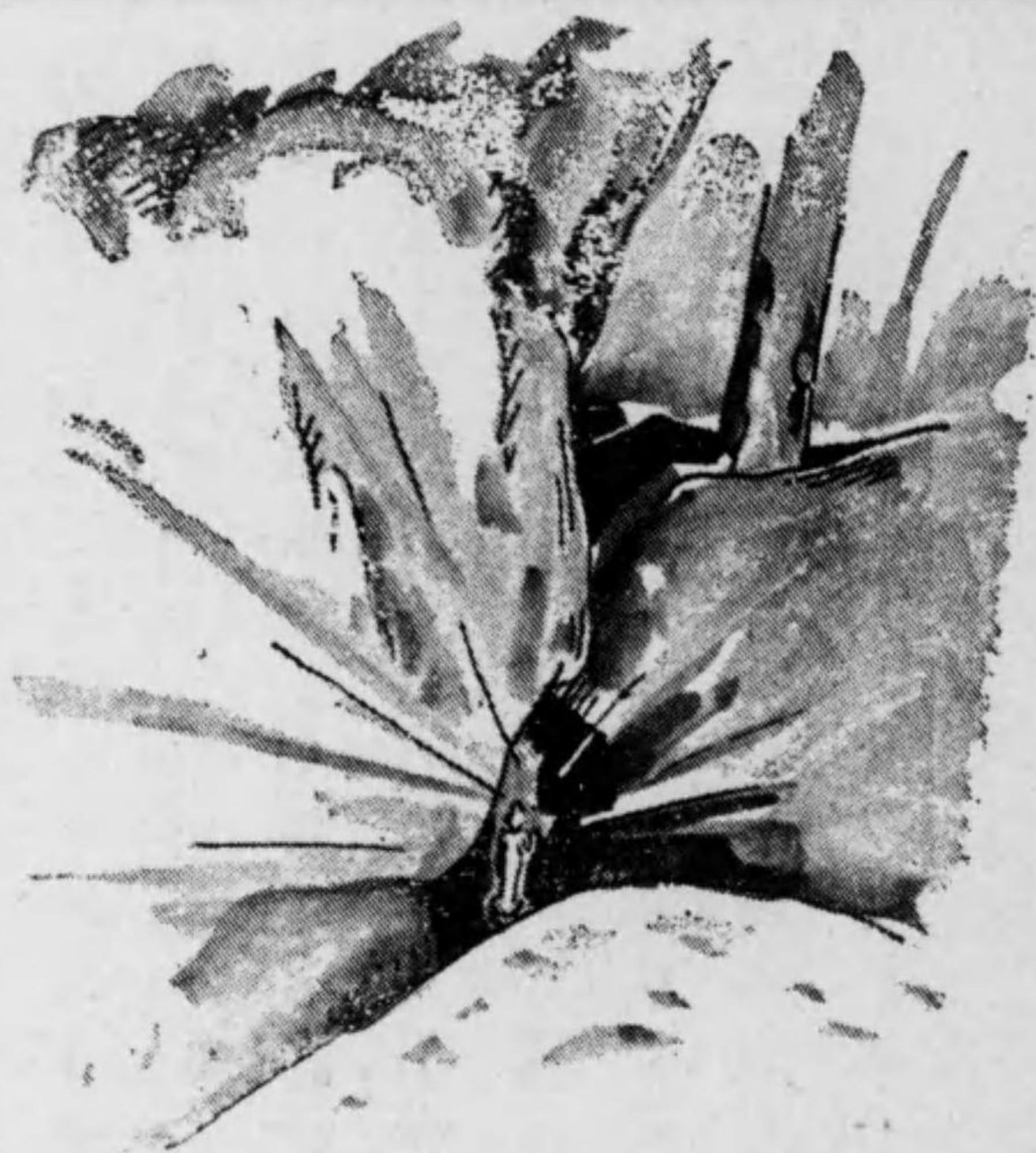
ちました。怪物は、深手をおつて、うめきながら、山奥の方へ小笹を分けて逃げて行つてしまひました。夜が明けました。村の人たちが、こはくお宮へ来て見るこ、侍は血のついた刀をさげて、皆の上つて来るのを待つてをりました。侍は、

「怪物はたしかに退治した。それをごらんなさい。」  
 と言ひました。見れば、血が、ぼくくと落ちて、山の方へつゞいてゐます。皆が、血のあとをつけて行くこ、一本の大木の根本に岩屋があつて、入口に劫をへた大きな狒々が、血まみれになつてたふれてをりました。村の

人たちの喜びはどんなであつたでせう。  
 それからは、もう怪物は出なくなりまして。人身御供も、その年かぎりおしまひになりました。

### 山寺の小佛様

昔、河野村の一人の百姓が、ふと川西の方をながめますと、山吹村のあたりの山の中腹に、何か光る物が見えました。何だらうかさふしぎに思つてをりますと、次の日にも、また同じやうに光る物が見えます。それから、毎日同じやうに光るので、これはいよくあやしいと思つて、おこなりの人と一しょに行つて見ることにしました。天龍川を渡つて、だんく山の方へ上つて行きました。



このあたりと思はれる所まで来て、そこらをさがしてを

りますと、重なり合つた大きな岩の間から、ぼうつと光がさしてゐるのが見えました。二人は、恐る恐る中をのぞいて見ました。そこには、小さな佛様が立つてゐらつしやつて、御光がさしてゐるので

ありました。二人は、そのありがたいお姿に、思はず手を合せてをがみました。それから、佛様をこんな所に置いてはもつたいたいといふので、穴からお出し申し、山寺で永くおまつりしていただくことにしました。

### 赤い夕顔

大下條村に、昔、和地野城といふお城がありました。ある夜、不意に敵が攻め寄せ、城へ火をつけて、どつとこきの聲をあげました。城の兵士たちは、力を合せてよく防ぎましたが、敵は多勢、味方は無勢、さうく攻め破られて、大將はじめ家來たちは、一人残らず討死してしまひました。その時に、うづまき上る煙の中から、ころがるやうに逃

れ出て来たのは、奥方のお萬様でありました。かはいらしい男の子を、しつかりと胸にかゝへたお萬様は、忠義な家來の働きで、敵の中をあやふく抜け出るここが出来ました。

ふりかへつて見ると、住みなれたお城は、眞赤にもえ上つて居ります。四方はもう敵が一ぱいで、誰一人たのむ人もありません。お萬様は、風のそよぎも敵かこうたがひ、水の音をも追手かこ恐れながら、やうやくとなり村までたどり着くことが出来ました。

こゝは旦開村の新野、青田を吹く風も静かに、道ばたに

は、夕顔の白い花が、ゆふべの戦の事も知らぬ顔に咲きほこつてをります。お萬様は、何心なくその一つを取つて、かはい、我が子にやりました。きれいな花を手にした子供は、大へんにうれしさうでありました。百姓の男は、それを見て大そうおこりました。

「花盗人め」。とお萬様を叱り、喜こんでゐる子供の手から、その花をひつたくりました。子供は聲をあげて泣きまじた。お萬様は、けつしてぬすむ氣ではなかつたけれども、これも落人の悲しさ。お萬様は、どんなにくやしかつたここでせう。

「もし来年もこの家に夕顔の花が咲くならば、私のうらみで、真赤に咲かせて見せませう。」  
といつて泣きました。

その後、お萬様親子は、逃げて行くさちゆう、悪者のために悲しい最後をこげました。

翌年の夏が来ました。道ばたには、去年のやうに、夕顔のつるがよくのびてゐます。百姓は、それを見て、今年も白い花がたくさん咲くと思つて、喜んでをりました。夕方の風が、そよ／＼とつぼみに何かさゝやいたかと思ふと、花は静かにほころびました。それがどうでせう、

血のやうに真赤な色でありました。

去年の事をやうやく思ひ出した百姓は、石のやうにたゞずんで、深いため息をつきました。

その家では、それつきり夕顔を作ることをやめました。

村の人たちは、「赤い夕顔」をいつて、このあはれな物語を残してをります。

# 寶珠の玉

鼎村の願王寺の森に、古狐が住んでゐました。毎晩出て来ては、畠を荒したり、鶏をこつたり、時には大入道なごにばかけて通りがかりの人をびつくりさせたりしました。お百姓たちは困つて、狐退治をしやうといふことになりました。

けれども、相手は古狐です。お百姓たちは、いろくくと相談してみましたが、よい考へも浮びません。どうした

らよいかと、しあんにくれてをりました。するこ、一人の百姓が、

「願王寺にゐるお武家様は、見た所なく強さうな方だ。あの方にたのんで、退治してもらつたらどうだらう。」

と言ひました。皆の者は、手をうつてさんせいしました。そのお武家様といふのは、兼益といふ九州の浪人でありませす。兼益は大そう琵琶が上手でありました。今日も、お寺のおざしきで琵琶をひいてをりますこ、お百姓たちが、大勢庭の木戸口からはいつて來ました。

そして、かはるがはる頭を下げながら、

「お武家様、今日はお願ひがあつて來ました。どうかお聞き下さい。」

さいつて、狐退治のことをたのみました。兼益は、お百姓たちの言ふここをじつと聞いてゐましたが、

「よし、それで今夜退治して上げよう。萬事はこのわしにまかして置きなさい。」

さつそく引受けました。お百姓たちは、喜んで、日の暮れるのを待つてゐました。

その晩は美しい月夜でありました。兼益は、えんがはに

すはつて、琵琶をひき始めました。お百姓たちは、息をひそめて、後の方にひかへてゐます。青白い月の光の中に流れる琵琶の音は、心のない木や石までも、耳をすまして聞くかと思はれるほどでありました。

その時、きれいな着物を着た小娘が、どこからともなく現れて、垣根のかげに身を寄せ、一心に琵琶の音を聞き始めました。兼益は、眼ざとく見つけましたが、そのままひき續けてゐます。琵琶の音はいよ／＼さえ渡りまじた。やがて、小娘の長い髪もこがちらこゆれたと思ふと、兼益の手から小柄がピカリここんで、あやしい叫び聲こ



共に、小娘の姿はかき消すやうになくなりました。今まで晴れ渡つてゐた大空は、にはかにかき曇つて、稲づまが走り、雷鳴がこゝろき渡りました。兼益は、刀を抜いて、やみの中へおどりこんで行きました。やがて、向かふの森で、百雷の一時に落ちたやうな音がしたかと思ふと、空はからりこ晴れて、美しい月が、また皎々とかゝやき出しました。

「皆さん、狐はたしかに退治しました。安心なさい。」  
 といひながら、兼益は、にこくしてもどつて來ました。お百姓たちは、あまりの恐しさに、すつかりちゝみ上つ



てゐましたが、やうやく我にかへりました。

「お武家様、まここにありがたうござい  
 ました。これで、やつと助かります。」  
 こ口々にお禮を言ひました。さて、家へ  
 歸らうとしますと、向かふの丘の上を、  
 狐火が、ちらく／＼と長い行列をつくつて  
 行くのが見えます。それがばつと消える  
 と、今度は、おとむらひのかねの音が聞  
 えて來ました。お百姓たちはもう歸るど

ころではありません。その夜はお寺で明かしてしまひました。

翌朝、兼益がお百姓たちを連れて、かねの音のした丘へ行つて見ますと、そこら一面ふみ荒らされて、新しい土饅頭が一つ出来てをりました。堀起してみると、中から劫をへた白狐の死がいが出て來ました。

又、お寺では、坊さんが垣根の下でふしぎな玉を拾ひました。それは劫をへた狐の尻尾についてゐる寶珠の玉だらうといふことでした。

## 犬神様

昔、遠山に、一人のれふしがありました。毎日、犬を連れて山へ上り、え物を取つて來ては、くらしてゐました。或朝、暗いうちに、池口山へ上り、松の大木の下で一休みして、夜の明けるのを待つてをりました。すると、今までおこなしくしてゐた犬が、どうしたのか、にはかに大聲でほえ出しました。れふしが、「やかましい。」といつて叱つても、なかくきません。それどころか、ますます

ますはげしくほえ立て、はては目の色をかへ、今にもくひつきさうなやうです。れふしは、「これは気がくるつたな。」と思ひ、山刀を抜いて、犬の首を切り落してしまひました。

するこ、犬の首は、すつと宙をこんで行つて、



後の松の下枝にさびついたかと思ふこ、恐ろしい地ひきかして何か落ちて来ました。おどろいて、見ると、一丈餘もある大蛇です。のどの所には、切られた犬の首がしつかりこくひついてゐました。

れふしは、はじめ、犬がしきりにほえ立てたわけを知り、忠義な犬を殺してしまつたことを大そうこうくわいしました。れふしは、泣く泣く、大の死がいをそこへねんごろにはうむつてやりました。

その後、村の人々は、山のふもとにお宮をたて、犬神様とよび、この忠義な犬を永くまつりました。

# 尾科文吾

文吾は、龍江村の尾科の人でありました。體が人並すぐれて大きく、又、不思議なほど力がありました。或夕方のこと、文吾の母親が南瓜棚の下で風呂に入つてゐますと、にはかに大夕立がやつて來ました。あはて、出ようこしますと、

「まあ、お待ちなさい。」  
 と言つて、文吾は、母親がはいつてゐる風呂桶を、軽々



こかゝえて軒下へ運びました。母親は、文吾の大力にお  
どろきました。

文吾は、或時、江戸見物を思ひ立ち、旅支度をして出か  
けました。折から、村に道普請が始まつてゐて、大岩が  
一つじやまになるので、みんなでおいしよおいしよと引  
つばつてをりました。文吾は、この有様を見て、

「ちやうど芋蟲に蟻がたかつたやうだ。」  
と、大口をあいて笑つたから、村の人たちは承知しませ  
ん、

「生意氣をいふなら、貴様一人で動かして見る。」

「よし来た。皆のしゆう、どいたどいた。」

と言つて、文吾はのそくと前へ出て行きました。そし  
て、大岩をひよいこかゝえて、向かふのたんぼへ投込み  
ました。文吾は、みんながあきれてゐるのを後にして、  
さつさと江戸見物に出かけて行きました。

文吾が旅から歸つて来て見るこ、この間たんぼの中へ投  
込んだ岩を、今度は大勢で引上げてゐるさいちゆうであ  
りました。文吾は、笑ひながら、その岩を片づけてやり  
ました。

飯田のお城に普請がありました。或日、文吾は、人夫に出る番にあたって出かけましたが、あまりおそく行つたので、もう仕事が始まつてゐました。みんながせつせき働いてゐるのを見た文吾は、いきなり手頃の青竹を引抜き、しごいてたすきにかけました。一同がびつくりして見てゐるこ、一人で、大きな竹藪を、また、く間に、根こそぎ引抜いてしまひました。かゝりの役人も、たまげて、この事を殿様に申し上げました。殿様は、大それたこばれて、

「何なりと、ほしいものをとらせよう。」

とおつしやいました。餅好きの文吾は、

「それでは、お餅を下さい。」

と申しました。

「それはたやすいことだ。」

と、お勝手元へ命じてつかせませすこ、文吾はつく白もつく白も、食べてしまつて、さうく餅を三白も平げてしまひました。

殿様が、或日外出をいたしましたころ、にはかの大雨にあ

ひました。松川の水が急にまじり、橋さいふ橋は皆落ち  
てしまひ、お城へ歸るここが出来なくなりました。家來  
たちも、大へん困つて、川岸に寄り集り、何かよいくふ  
うはあるまいかと、評定をしてをりました。その日、飯  
田へ來てゐた文吾は、この様子を見て、しばらく考へて  
をりましたが、やがて、御門の大扉をかつぎ出し、松川  
の流をせぎ止めてしまひました。おかげで、殿様は、お  
城へ歸るここが出来ました。この時も、文吾はたくさん  
のごほうびをいたゞきました。

文吾は、繩なひの名人でした。

或時、村の人たちが集つてゐるところで、繩なひの話が  
出ました。すると、文吾は、

「速くなふここでは、おれにかなふものはあるまい。今  
こゝでおれがなふから、誰か繩のしりを持つて走つて  
見ろ。」

と言ひました。みんなは、文吾があまり大きなことを言  
出したので、今日こそじまん鼻をへし折つてやりたい  
ものだと思ひました。そこで、村一番に足の速い男が、  
文吾のなふ繩のはしを持って、驅出しました。けれども、

文吾は、平氣でしやりしやりこなつてをります。男は、繩を持つて、一生けんめいに走つて行きました。とうとう、三里も先の阿島までこんで行きました。その頃には、文吾の後に繩が山のやうにたまつてゐました。

文吾は、毎年元日には、殿様の所へ御年始に行つて、二斗のお餅をちやうだいするのが例になつてをりましたが、世間では、よくも食べられるものだと、不思議がつてをりました。

或年の正月のころでした。一人の男が、お城へ行く文吾

のあとから、歩いて行きますと、文吾は、途々砂の中へ何かいけて行きました。何だらうと思つて、掘つて見ると、生大根の切れはしてありました。男は、物好きに、その大根を片つばしから掘出しては、すてゝしまひました。

文吾は、たぐさのお雑煮を腹一ぱいにいたゞいて歸る途々、いけて置いた大根を掘つて見ましたが、一つもありません。何時も、ごちそうになつた歸りには、生大根で腹ぐあひをなほしてゐたのに、今度はそれが出来なくて、文吾はさうく死んでしまひました。



401  
221

昭和十五年三月八日印刷  
昭和十五年三月十二日發行

代著  
表作者

長野縣下伊那郡市田村二五八番地  
本堂順一

發印  
行者兼

長野縣長野市妻科一七三  
大日方利雄

印刷  
所

長野縣長野市南縣町六五七  
信濃毎日新聞株式會社

發行所

信濃毎日新聞社

終